

子ども達の作品から

○西日本読書感想画コンクール

西日本読書感想画コンクールにおいて、6年生のM・Sさんの作品が、福岡県入選に選ばれました。受賞、おめでとうございます。宮村さんの作品は梶井基次郎の「檸檬」を読んだ感想画（右）です。



○青少年読者感想文全国コンクール

青少年読書感想文全国コンクールにおいて、本校から2名の児童が「特選」を受賞しました。前号では、5年生の寺田陽菜さんの感想文を紹介しました。今回は、同じく「特選」を受賞した6年生のM・Sさんの感想文を紹介します。

(※ 読書感想画も受賞し、凄いですね！)

人間と動物の心の通じ合いとは

麻生学園小学校 六年 M・S

最近、よくニュースで東北地方や北海道地方に熊が出没する記事を見かけるようになった。僕は思わず宮沢賢治の「なめとこ山の熊」を思いだした。今までに何度も読んでいたけれど、もっと深く読んでみたいと思い読みかえしてみた。あらすじはこうだ。ある村に渕沢小十郎という熊を狩る名人がいた。だが、小十郎は本当は熊を狩りたくない。それはなぜか。実は小十郎は熊の言葉が分かり、熊は小十郎のことが大好きだからだ。だが、小十郎は生きていく上で熊を殺していくなければならない。そんなある日、しとめようとした熊に殺すのを「二年待ってくれ。」と言われ、小十郎がその言葉を守ると熊は約束通り、小十郎の家の前で息絶えていた。その後、今度は小十郎が熊に襲われるという悲劇の話である。この本は自然の中で生きる熊と、熊を殺して生活をする獵師の葛藤を描いている。お互いが生きるためにどうしたら良いのか、生きるために殺し合うのは仕方のないことなのか、ぼくはまだ答えを見つけることができないままでいる。



よく野生動物である熊との共生や共存等が声高々に呼ばれているが、現実問題として果たして可能だろうか。九州では熊に出くわす機会がないから他人事でそんな心配する事もないが、これが東北・北海道地方に住んでいて、身近に熊の存在を感じていたら話は別である。あんな大きくて危険な動物と共存なんて恐ろしくて考えられない。理想としては熊との共生・共存をあげられるが、現実はどう考えても無理がある。あるところでは田や畑が荒らされ、あるところでは人が襲われる。日々を生きるだけでも精いっぱいなのに熊と共に生・共存なんて考えるだけでも恐ろしくて仕方がない。

この物語は、不思議な事に人間と熊が殺し殺される間がらにもかかわらず、お互いに情をもっており、決して憎しみ合っていない。熊は小十郎が大好きで小十郎も出来ることなら熊を殺したくない。お互いの死や生き方に敬意を払っていて、愛情にあふれている。この物語に似た宮沢賢治の作品を僕はもう一冊知っている。それは「よだかの星」だ。これには生きるための過酷な世界や弱肉強食の生活が描かれている。この二つの作品は自然界を愛する宮沢賢治の死生観がよく表現されている作品だなあと思う。「なめとこ山の熊」の作品で特に印象深いところは、小十郎が熊に襲われ命を落とす時、「熊ども、ゆるせよ。」と熊に許しを請う描写である。切なくて何とも言えない心持ちにさせられる。相互理解が進んでいて、悲しいけれど優しい気持ちにさせてくれる場面である。生きとし生けるもの、重たいテーマであるけどもこれからもずっと考えながら生きていかないといけないテーマである。最後に今回読み返して思った事は人間も動物も自然界で生かされていると思った。